

平成20年度

# 研究だより

南部小学校

H20. 11. 20

No. 9

<兼 子>

第9回授業研究会（11月19日）ご苦労様でした。

1の1・算数科・「ひきざんランド しぜんのいえへ ゴーゴーゴー！」（ひきざん2）

田宮 泉先生の授業から学ぶ

## <成 果>

### 【仮説1について】

- ・自然の家でひろってきた「くぬぎ」を問題場面に用い、紙コップで作ったマラカスの中から取り出すということが子ども達の興味を引きつけ、意欲的な姿勢に結びついたのではないだろうか。
- ・また、当初「どんぐり」と問題をしていたのを、子どもの声に応じ「くぬぎ」と変えたところも、自分たちの問題として捉える意識につながったのではないだろうか。

### 【仮説2について】

- ・ペア学習において、初め右の席の子が「だるまさんが立ったままー。」という教師の声で移動し友達の考えを聞き、次に左の席の子が移動し聞くというように、不特定の子と意図的に交流させる工夫が見られた。そのことにより、だれにでも説明できる力が育っていくのではないだろうか。
- ・前時までの減加法を使った解き方の後、ブロック操作で減々法を使った考えに触れ、子ども達の中から「はやい」「かんたんだ」という声が聞かれ、ちがう考えを認めながらも算数のよさに触れさせることができたのではないだろうか。

## <課 題>

- ・減加法の操作に慣れている子にも減々法のよさに触れさせたいという意図は伝わったが、減々法の際、どういうときに使うという判断が小さい数のときというくりが難しい。例えば、 $11-2$ 、 $11-3$ （10のまとまりから1や2を引くもの）では減々法の考えがよいように思うが、 $11-4$ （10のまとまりから3を引くもの）となると微妙に感じてしまう。その子なりの感覚（判断）になるのかなと思いました。
- ・ブロック操作で、どこの部分から引くのかという約束事を決めておくよかったのではないだろうか。
- ・減々法の解き方の式での考えの表示の仕方難しいですね。補助数字や補助の線が多くなるとかえって混乱してしまう子もいるのではないだろうか。